

令和4年度 東久留米市立中央中学校 学校評価報告書

学校教育目標	人権尊重の精神を基調として、豊かな人間性と社会性を培い、自主・自律・自治の精神に満ち、かつ培った力を存分に表現し、喜びをもって自他共に生きることができるとする。そのために次の目標を定める。	共に生きる喜びをつかもう ○進んで学ぶ ○人を思いやる ○体力をつける 行動目標：自主・自律・自治・表現	教育ビジョン	【目指す学校像】	○生徒、保護者の人権・安心・安全が守られる学校 ○生徒が日々の教育活動で夢や希望をもって生活できる学校 ○生徒一人一人に生きる力をはぐむ学校
				【目指す児童・生徒像】	○笑顔ですすんで仲間づくりをする生徒 ○困ったときはお互い様、相談できる生徒 ○仲間とともに粘り強く努力し、高め合う生徒 ○学んだことを仲間に表現できる生徒
				【目指す教師像】	○生徒の良さを認め、自ら声をかけ、生徒一人一人を大切にしている教師 ○人権尊重の理念を理解し人権教育を推進する教師 ○チーム中央で情報を共有し課題解決できる教師
前年度までの学校経営上の成果と課題	○いじめのない学校づくりに向けて、生徒会活動により生徒主体ですすめることができた。 ○評価・評定について説明し、生徒が見通しを持てる学習につなげた。 ○規範意識が高く、教室での役割を担い、活躍した生徒の達成感が高い。			●生徒の学習習慣が身に付くように計画表の作成や学級、学年により啓発を行った成果はこれからである。 ●不登校生徒の増加に対応して、生徒が自己肯定感、自己有用感をもち生活ができるように教職員全体で取り組んだが不十分である。 ●家庭学習が習慣化できるよう計画表の配布や学級だよりの時間数掲載で取り組んだが、目標には到達していない。	

東久留米市第2次教育振興基本計画				中期経営目標 (令和6年度までの3年間)	短期経営目標 (1年間)	評価指標・評価基準		自己評価		学校関係者評価		次年度の方策
No.	三つの柱	基本施策	今年度学校で重点を置く「具体的施策」			取組指標	成果指標	取組	成果	評価	コメント	
1	I 健全育成	いじめ問題への対応	いじめ防止対策推進基本方針に基づいた取り組みの推進	いじめ防止対策推進基本方針に基づいた取り組みを推進し、生徒の人権が守られ、いじめを許さない学校とする。	いじめをゆるさない学校風土をつくる。 ・早期発見、早期対応、早期解決を図る。 ・生徒会を主体としたいじめ防止対策を行う。	いじめ対策委員会毎週情報収集を行い対応する。 ・校長講話でいじめ防止の話をふれ、いじめ、事例が発生した際に行う。 ・道徳で年3回いじめ防止につながる授業を行う。 ・年3回生活アンケートを行い、対応する。 ・生徒会本部、各種委員会での活動でいじめ防止につながる取組を生徒主体で行う。	・生徒のアンケートでいじめをゆるさない学校であるとの肯定的回答を80%以上とする。(87.8%) ・校長講話や道徳の授業はいじめを防止の指導がされていると回答する生徒を80%以上とする。(95.8%) ・いじめに関するアンケートや困ったときに相談でき学校のいじめ対策は評価できるとした保護者を80%以上とする。(78.3%)	4	3	3	・学校、生徒会、家庭共にいじめ防止に努め効果が出ていると思う。 ・表面化しないいじめなどもあるだろうから、評価しづらいと感じる。 ・不登校の子どもももっと相談できる場所をもうけたり、教室までなくても学校に行くことだけでもできるような環境ができれば良いと思う。	・いじめ対策委員会の機能を未然防止に役立てるよう年間計画に位置づけ計画的に指導を行う。いじめ対策基本方針について教員理解と保護者への説明を行う機会を設ける。 ・人間関係を築くことが苦手な生徒を把握し、集団活動で困ることのないように校内委員会等を活用していく。 ・いじめ案件の指導においては、事前に保護者に連絡し、居残りによる聞き取りや事実の確認を行い、すすめることとする。
2	I 健全育成	個性を認め合う教育の推進	自己肯定感・自己有用感の醸成	生徒を褒め、よさを認め、生徒が自信がもてる教育を進める。	多くの活動場を意識的に設定し、生徒を褒め、よさを認め、生徒が自信をもって活動できる教育を行う。	・学校生活のあらゆる場面において、生徒を褒め、よさを認め、普段の生活、面談、キャリアパスポートなどにコメントする。 ・自らすすんで挨拶できる生徒を育成する。	・生徒、保護者アンケートで先生から褒められたり、認められていると肯定的回答を85%以上とする。(生)91.7% (保)76.0%) ・すすんで挨拶すると回答した生徒を80%以上とする。(88.1%) ・学校は安心・居心地の良い場所となっていると肯定的に回答する生徒、保護者を80%以上とする。(92.5%)	4	4	4	・以前より生徒からの積極的な挨拶が少なくなったと感じる。 ・自信につながる褒め方をタイミング良く行っていただきたい。	・生徒の自己肯定感を高めるために、適切な役割をもたせ、役割を果たしたときには大いに褒め、生徒の良さを引き出していく。 ・欠点よりも長所に気づかせる指導を行う。 ・進路指導においては、自己評価を適切に行い、自分の強み、弱みを理解し、目標の設定に役立てる。
3	I 健全育成	規範意識や他人への思いやりなど豊かな心を育む教育の推進	規範意識と豊かな人間関係を育む教育	・生徒会活動、学校行事を通して生徒相互のよりよい人間関係や生徒と教員の信頼関係を築く。 ・人間関係がとれない生徒に焦点をあて、発達特性の理解、集団作りを行う。	・挨拶運動、自主活動、自立活動、絆づくりをねらいとした行事の運営を行う。 ・特別支援校内委員会、スクールカウンセラーの助言を活かした学級、学年運営を行う。	・他人に対して親切な行動をとる生徒の育成を行う。 ・生徒を呼ぶときは敬称をつけて丁寧に行う。 ・困っている生徒の側に立った指導を行う。	・生徒アンケートで思いやりや行動、親切な行動を心がけたと回答する生徒を70%以上とする。(95.2%) ・教員は生徒一人一人を大切に、丁寧に指導していると回答する生徒を80%以上とする。(94.0%) ・きまりを守って生活していると肯定的に回答する生徒を80%以上とする。(86.1%)	4	4	3	・しっかりした生徒会活動が行われている。学校との連絡を密に良い方向へ発展してほしい。 ・家庭学習の習慣は、家庭の協力も大切、家ででの話し合いの中で学習目標の達成を目指してほしい。	・特別活動において、ソーシャルスキルトレーニング、互いの良さの気付き合い等計画的に位置づける。 ・学校の良さを、自分たちのきまりとして考え、よりよい学校とする主体的な行動につなげる。 ・行事を学級のきずなづくり、居場所作りの場として位置づける。 ・教員の人権意識を高め、生徒の呼び方には敬称をつけ、一人の人間として対等に関わる。
4	II 学力向上	確かな学力の育成	家庭学習の積極的な展開	・生徒の家庭学習の習慣を定着させる。各学年の家庭学習実施時間を1年生60分以上、2年生90分以上、3年生120分以上と設定し、家庭学習の充実を図り、確かな学力の育成を目標とする。 ・学習困難な生徒に対し質問教室や補充学習の場を有効に活用する。	・各教科や各学年から家庭学習や学習内容を復習することの重要性を十分に伝え課題を出し、毎日時間以上の家庭学習や復習に取り組むことにより家庭学習の習慣を定着させる。	・各教科の学びのプランに家庭学習の内容や自己の目標を各欄を設け、主体的に学ぶ生徒を育成する。 ・定期考査前の学習時間を計画表指導により確保させる。	・生徒アンケートで、各学年の家庭学習実施目標時間(挑戦した)とする生徒を80%以上とする。(77.7%)	3	2	2	・部活動もやり、部活以外でも運動をしたりするためなかなか勉強に向いていないのではないかと。 ・家庭学習を自分から時間をつくってやるのが難しい。宿題として出されればやるのかな?と思う。 ・学校の授業の改善を望む。	・生徒の学習時間の意識は定着しているが、現実家庭での取組につなげられていないのが現状である。そこで、タブレット端末を活用し、個別最適な学習が行えるように研究テーマとして取り組む。 ・授業の形態を、教師が主導から教師は伴走者として位置づけ、生徒が課題を発見し、主体的な学びとするものに変わっていくことを研究する。
5	II 学力向上	確かな学力の育成	ICT機器活用等による多様な指導方法の工夫	全教員が、一人1台が配置されたタブレット端末やICT機器の活用した授業ができるように推進する。	・タブレット端末の活用方法を先進的に取り組んでいる教員を講師に研修会を行う。 ・全教員が年内1回の活用を図る。 ・年1回は全教員がタブレットを活用した授業を行う。 ・アンケートなど活用をすすめる。	・東久留米市研究奨励校として「情報活用能力の育成」をテーマとして取り組む。 ・総合的な学習の時間で活用をすすめる。 ・年1回は全教員がタブレットを活用した授業を行う。 ・アンケートなど活用をすすめる。	・3分間で150文字のタイピング能力を身に付けた生徒を70%とする。(90.4%) ・ワード、エクセル、パワーポイントの技能を高め、タブレット端末を活用できる生徒を70%以上とする。(94.9%) ・研究授業を100%の教員が行う。	4	4	4	・急激に進んでいるICT機器の活用には、専門家の指導を得て、教師の導入を推進していただければと思います。 ・小学校からタブレットを使用しているのでタイピングが早くなっている。	・今年度は、これまでやってきたことをタブレット端末で行うことを重視してきた。来年度は、生徒が主体的に活用する授業改善、活用方法を研究していく。 ・研究では分科会を設け、講師から学ぶことから教員集団が研究テーマにそって開発することを主眼とする。
6	II 学力向上	日本人としての自覚と豊かな国際感覚をもつ人材の育成	言語活動の充実によるコミュニケーション能力の育成	各教科、特別活動で計画的に言語活動を取り入れ、主体的、対話的で深い学びを深めるためのコミュニケーション能力の向上を目標とする。	各教科、特別活動で計画的に言語活動を取り入れ、考えをまとめる、分かりやすく説明する力や他の考えを理解し自分の意見を深めるためのコミュニケーション能力の向上を図る。	・根拠に基づいて自分の考えをまとめる授業を各教科で行う。 ・自分の考えをもち、他者との意見交換をもち深める授業を行う。 ・文章で自分の考えを表現する授業を行う。 ・タブレットPCの活用により、上記の活動がより活発に行えるように取り組む。	生徒アンケートで、「授業は分かりやすい」「自分の考えをもつことができた」と肯定的な回答を80%以上とする。 (分かりやす)95.0% -自分の考えをもつ82.6%)	4	4	3	・相手の考えも理解できて話す力も付いて心身共に育ちつつあると思います。 ・コロナ感染から3年、不登校になる生徒も増加していると思いますが、学校、家庭の対応の仕方で少しは変わるのではないかと。	・グループ活動が教科による違いをなくし、学校としての話し合い活動を推進する。 ・授業の振り返りを、自分自身で何が分かり、何ができるようになったのかを文章化し課題を明確にさせる。
7	III 教育環境の整備	特別支援教育の充実	特別支援教育の充実	・発達特性により不登校につながらないように、生徒理解をすすめる不登校の未然防止を行う。 ・特別支援学級と通常学級の生徒が互いに理解し合い、偏見や差別のない学校生活を築くことを目標とする。	・発達特性により不登校につながらないように、生徒理解をすすめる不登校の未然防止を行う。 ・特別支援学級と通常学級の交流の機会を増やす。	・月2回の校内委員会の開催により支援を充実させる。 ・特別支援学級での支援を通常学級で生かされる取組を行う。 ・集団生活が苦手な生徒を自習室で計画的に対応していく。 ・教員に受容対応の意識をもたせ生徒が孤立しないようにする。	・月2回開催する。(開催できた) ・集団が苦手として不登校になっている生徒を計画的に運営する自習室を活用し、居場所として全ての生徒が週1回は登校できるようにする。 ・長期欠席者には少なくとも週1回は関わりをもつ。 (できないことがある生徒がいる)	4	3	3	・コロナ禍の中、地域と連携しての防災教育ができていないのが残念です。また、引き取り訓練は働く親が多くなっている今、どの程度引き取りがあるのか。	・特別支援教育校内委員会を月2回実施し、支援の必要な生徒の情報交換を行う。 ・登校が難しい生徒に対して、自習室を開設し、登校支援を引き続き行う。 ・5日間連続して生徒と連絡が取れない場合には家庭訪問を行う。
8	III 教育環境の整備	安全・安心な学校づくり	地域や保護者と連携した防災教育	防災教育、避難訓練、感染症対策、熱中症対策などの安全指導により、生徒の命を守る。そのために保護者との連携を密にし、家庭と一体となり教育活動をすすめる。	・保護者へ通知、保護者の期待し、安全指導し、教育活動をすすめる体制を築く。 ・マイ・タイムラインを活用し、家庭で防災に関する話し合いがもてるようにする。	・学校事故、けが、緊急対応が必要な場合はもちろんのこと些細なことも保護者と情報共有する。 ・引き取り訓練を行い、万が一のときの家庭の協力を周知する。 ・東京マイ・タイムラインの配布、活用を推進する。	・引き取り訓練で保護者の引き取りを70%以上とする。(58.8%) ・保護者アンケートでコロナ対策、熱中症対策を肯定的な評価を80%以上とする。(90.8%) ・学校の避難訓練や安全指導は適切に行われていると回答する保護者を80%以上とする。(94.5%)	4	4	4	・先生もプライベートを充実させた方が、いろいろよくなると思う。 ・生徒会が積極的にボランティア参加を呼びかけて「花いっぱいボランティア」は120人、六仙公園ボランティアは80人名を多く参加があったと思う。	・学校での怪我、事故の防止に引き続き努めていく。 ・学校事故においては、保護者への説明を行い、他の生徒との関わりにおける事故については、事実を確認しその日のうちに連絡することを実施する。 ・病院に搬送する場合には、事故の説明を行うところまで責任をもつ。 ・新型コロナウイルス対応については、市教育委員会と連携し行う。行事については、感染防止に努め、実施をしていく。
9	III 教育環境の整備	各学校におけるカリキュラム・マネジメントの推進	学校評価に基づく学校経営の継続的な改善	職員会議の効率化を図り、時間外勤務を減少させることで一月45時間超の職員を減少させ、ライフ・ワーク・バランスへの満足度を向上させることを目標とする。	職員会議の議題への周到な事前準備と企画会議での十分な検討により職員会議の短縮を図る。	・職員会議の1時間以内100%とする。 ・時間外勤務一月45時間超0人とする。 ・週1日、さらに定期考査前の定時退勤デーの推進をする。	ライフ・ワーク・バランスへの満足度70%以上とする。	3	3	3	・生徒のおしゃれの感覚が以前と変わっている。また、私服なども大変安価で買うことができている。学校のきまりも変化してよい。	・部活動の指導においては、ガイドラインにそって行う。 ・年間計画をもとに計画的に仕事を行い、仕事に偏りのない配置を行う。
10	III 教育環境の整備	安全・安心な学校づくり	児童・生徒の主体的な取組	東京2020レガシーとしてボランティア・マインドの醸成を図る。	青少年協や地域と協力し、生徒会の主催によるボランティア活動を推進する。	・年3回のボランティア活動の推進と生徒の参加を増加させる。	・1回の参加者の目標を100名とする。(80名、120名、80名) ・1回はボランティア活動に参加したとする生徒を70%以上とする。(80.9%) ・保護者アンケートで生徒会がボランティア活動を推進していることを評価する保護者を80%以上とする。(88.5%)	4	2	3	・年3回生徒会を主催としたボランティア活動を推進した。生徒の参加は多いときで80名となったが、生徒の70%以上が取り組むことはできなかった。 ・日常の生活では、人の助けになる行動がとれるようになったと回答していることから、日常活動に焦点を当て、困っている人の助けになることもボランティア精神につながることを共通認識していきたい。	